

Newspaper In Education

室蘭民報

むろみん

NIEサンデーキッズ



## 心の復興 笑顔で

前回に続き、東日本大震災被災地の岩手県釜石市で傾聴ボランティアなどに取り組んだ、室蘭・海星学院高校（香川謙二校長、236人）の生徒たちの活動報告の要旨を紹介します。

（成田真梨子）

### 室蘭・海星学院高 釜石ボランティア報告①

#### 伊藤 千澁（1年）

「釜石でのラグビーワールドカップが決まったでしょ。あれね、結構なお金がかかるみたいよ。でも、まだそこからそのお金を持ってくるか決まってるみたい。もちろん『開催、開催』言ってる人たちはうれしいんじゃない。そういう声の大きい人の声だけが響くのよね。決まったことだからしょうがないのよ。オリンピックだってそう。人手が東京にとられるし。建設資材だって、そのせいで良い値段になってるみたい。私達は『ふーん』って聞き流してるの。だってしょうがないじゃない。」「しょうがない」をよく口にする女性だと思いました。

ほかの方が「私の友達が亡くなって」という話をされると、彼女は悲しい顔をしながら「私も旦那が亡くなって」と切り出さ

れました。この時、思いました。大事な人が二度と帰ってこないことを『しょうがない、しょうがない』と思っているうちに、口癖みたくなってしまうのかもしれない。この人の悲しみが癒えるといいなと思いました。

お茶会でお話したおばあさんから「復興公営住宅のドアって、鉄製で丈夫なのは良いんだけど。私達、高齢者にはとても重いのよね。しかも風向きで開けられない時もあるの。そうすると外に出るのも面倒くさくて。家にずっといることも多かったの。でも、近くにスーパーが出来たら、ちよつと外出も増えたわ」という話も聞きました。

ある方が「私の友達、亡くなったの。でも4年経って、前向きにいくと思ってる。」「こつこつ話もできるんだ



#### 松井 玲菜（1年）

復興公営住宅でお茶会のチラシを配りに回りました。「北海道から来た高校生です。集会所でお茶会を開くのでぜひ来て下さい。私たち、出し物を用意しました。歌とダンスをします。来て下さい」。ドアを開くと、お年寄りの方が多かったので、怪しまれないように高校生感をだして、笑顔に気を付けました。

皆さんは相づちを打ってくれたり、中には「あら、北海道っていいわね。室蘭って左のほうでしょ。」「お、何の出し物をするんだい」などと尋ねてくださったりする方も少なくありませんでした。だんだん楽しくなって、周りを見る余裕が出てきて、気が付いたことがあります。廊下からは仮設住宅が見え、同じように仮設のほつからも復興公営住宅が見えます。

「お隣さんは引越したのに、うちはまだ仮設」。砂利の駐車場、トタン屋根、天井はすき間があり、虫や風を防ぐためテープで覆っています。仮設の方は、毎日、復興公営住宅をどう見ているのでしょうか。抽選に当たって引越せても、すべてが解決するわけではありません。収入や入居者数によって異なりますが、ある復興公営住宅では、家賃が1カ月で最大7万2千円かかるそうです。年金暮らしの方の中には、働かなくてはというプレッシャーを抱く人がいたり、仮設の人に申し訳ないという気持ちを持つ人もいます。



さらに驚いた出来事がありました。住民さん同士、とても仲良く話されているのを見て温かい気持ちになっていたり、「会つのはいつ以来かしらねえ

あ」とおっしゃいました。このような話の後に、必ず言われました。「身の回りの人達やこれから出会う人達を大切にしたい。そして後悔しないようにね。喧嘩をしてもすぐ自分から謝る事が大切だよ」。

大切な人を亡くされた方は多かれ少なかれ、後悔されているのだろーと思います。私達に同じ後悔をしてほしくないから、お話しして下さるのだと思います。

私は周囲の人を大切にしているのだから。高校に入ってから部活や勉強で、なかなか家族との時間がとれなくなってきた。顔を合わせる朝や夜、ご飯を食べる時。でも少し話すくらい。昔はもっと、手伝いや会話をしていたのに。正直、朝は苦手で、話すのは億劫だけど、家族に次に来る保証はない。身の回りの人達と会話をすることは聞く心と受け止める気持ちを大切にしようと思えました。「人の気持ちを大切に」。看護師を目指す私にとって一番の学びでした。

「そつねー、2年ぶろー」と聞いてびっくりしました。どつや一方の方はもう公営住宅に引越された方で、もう一人は仮設の方でした。お互いにたった数分のところに住んでいても、行けない、行きづらいのが実情だそうです。中には復興公営住宅で引きこもる方もおられるとのこと。チラシ配りをして実際に来られた方は、いつものメンバーばかりだったそうです。「新しいコミュニティには入りにくいかな」と考えさせられました。来て下さった方が「こつこつ機会がないと、家でテレビを見て過ごしているだけなの。外にはなかなか出られない」と話されているのも印象的でした。

復興はまだ終わっていない、震災を忘れないでほしい、東北の方々を想ってほしい。もし私の話を聞いて何か感じるものがあつたら、誰かにそれを伝えてほしいと思います。そして、東北ボランティアへの参加に繋がればうれしいです。

#### 大谷 優生（2年）

釜石の復興に取り組んでおられる商工会議所へ行きました。海星の先輩方が送った寄せ書きを2年経った今でも、よく見える位置に貼ってくださっていました。商工会議所の皆さんは商業面での町の復興、津波に強い町づくりに取り組んでおられます。お話をしてくださった伊藤さんは「この世のものとは思えない風景を見た」とおっしゃいましたが、その目は力強く、復興へと向かう信念の強さを感じました。

町に津波が到達したとき、国道は流されてしまいましたが、高い場所にあった道路に避難した数百人は、被害を免れました。その道は国道の代わりに人々に物資をもたらす道路となったそうです。津波から住民を守る、援助物資を釜石の方々につないだことから「命を守る道路」と呼ばれるようになりました。この道路が、釜石の再建の大きな手がかかりました。この道路が、釜石の再建の大きな手がかかりました。この道路が、釜石の再建の大きな手がかかりました。



研修4日目の早朝、激しい揺れで目が覚めました。その瞬間から私の頭はフル回転し始めました。避難はするのよ。津波はくるのよ。いま、何をすべきだろう。北海道にいる両親は大丈夫だろうか。すぐに先生が「津波の心配はないみたいだから。何かあったら起こすから、寝て。ただね、範囲が広い地震だったから保護者の方は心配してると思うんだ。メールしてあげて」。親にメールを送った後、なかなか寝付くことができませんでした。

「震源は盛岡市、最大震度が5、釜石は震度3」と書かれた携帯の画面をなんとなく見ながら、いろんなことが心に浮かびました。さつき感じたこれからどうなるのかわからない恐怖。心が締め付けられる感覚。商工会議所で伊藤さんがおっしゃった「命の重さ」。4年前のあの日、無くなった命。私は自分の命を大切にしているだろうか。どれくらい時間が経ったでしょう。「率先者たれ」という言葉にハッとしました。何度も巨大な津波に襲われた釜石。その歴史の中で生まれたこの心得。津波が来たらまず逃げる。それが他の避難に繋がるから。「これだ！」。命の使い方を生きた気がしました。次の日の傾聴が終わった後「ずっと笑顔だったから私も笑顔になれたよ」「私がやりますよ、が口癖みたいになってたね」と、スタッフさんや釜石メンバーが言ってくれました。この日は自分の命を大切に使えるのかもしれない。もちろん、いつでもそれを心がけることは難しいと思います。ですが、必要になったとき、きちんと率先者になれる人でありたいです。